

Title	コメント
Author(s)	丸山, 泰明
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2019, 2, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72085
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コメント

丸山 泰明

基調講演および各研究者の発表について、コメントすることにしたい。

金容儀氏による基調講演は、現代の韓国の大学における日本研究の現状と課題について概観した上で、沖縄民俗研究や柳田國男研究について自分自身の取り組みに基づきながら述べるものであった。

講演を聴きながら、私が考えたのは、韓国という具体的な「外部」の足場をもつ人物が行う日本研究の強さである。

近年の日本の大学行政や教育産業化した大学では、「国際」や「グローバル」をキャッチフレーズとして用いることがブームである。国際的な観点から日本を捉え、世界に向けて日本を発信していこうとする趣旨が麗しく語られる。しかし果たしてそこに内実はあるのだろうか。日本という国家の政治的・経済的プレゼンスが相対的に低下していく危機感の中で、日本の価値や役割をあえて世界に向けて誇示し自尊心を満足させようとする独りよがりのものだったりはいしないだろうか。

このような疑問を抱いていた中で、日本に留学し、日本で調査・研究を行い、現代の一般的な日本人では読むのが難しい柳田國男の著作を韓国語に翻訳するという実績に裏付けられた金氏による主張は説得力のあるものだった。このような人物だからこそ、廃止・縮小を余儀なくされつつある韓国の大学の「日本研究所」をめぐる危機意識と、日本研究の可能性の提起は重要であり、日本の研究者も情報を再認識する必要がある。

金日林氏による発表は、「マンガ・アニメ共栄圏」という、日本人を戦略的に挑発する言葉／概念を中心に据えたものだった。誤解を避けるために急いで付け加えると、私は気分を悪くしたわけでは決してない。むしろ意表と核心をつく言葉として受け止め、戦時中から現代までの文化状況を連続的に捉えようとするこの言葉／概念に魅力を感じている。マンガやアニメに限らず、広くサブカルチャーに視野を広げるならば、アイドルも「共栄圏」を築きつつある。例えば日本の女性アイドルのAKBグループは、自分たちの産業システムをアジアの各地に広げている。上海、台湾、フィリピン、タイ、ベトナム、インドネシアへと広がる姿は、まるで支配地を広げていった戦時中の日本の勢力拡大の跡を追っているかのようだ。もっとも、大東亜共栄圏のメタファーは確かに刺激的だが、ともすれば単調な分析になりかねない危うさをもっている。視野が広く、細かい差異に着目し、具体的な事実を資料から積み重ねていく着実な研究を期待したい。またアジアとの関係を、戦時下

の用語のメタファーで捉えるのならば、マンガ・アニメなどのサブカルチャーにおけるアメリカと日本の関係はどうなるのかが気になった。アジアとアメリカの両方を見渡すことによって、より重層的な議論が展開するのではないだろうか。

ガリア・ペトコヴァ氏による発表は、男性が女性役を演じることが今日では一般的となっている日本の古典芸能について、特に歌舞伎に焦点を合わせてジェンダーの観点から分析するものであった。大部分の日本人が「当たり前」「そういうもの」と無意識のうちに思い込み、違和感を覚えないでしまっているものである。さらにいえば、日本の古典芸能におけるジェンダーの問題は、男性の役者が女性を演じることだけではない。男性だけの芸能の世界に女性の役者（演者）が参入していくことによって生じる文化も研究対象になるだろう。例えば落語も従来は男性だけで演じられる芸能だったが、今日では多くの女性の落語家もいる。花魁といった女性の役はこれまで男性の落語家によって演じられるものだったが、女性の落語家が女性の役を演じるという、ある意味で当たり前のことに、違和感や葛藤を覚える人もいる。日本の古典芸能をジェンダーによって分析する先には、新たな視点や論点を提示する研究成果が生み出されるだろう。

セシル・ラリ氏による発表は、東京の王子にある神社の境内で毎年2月に催される凧市で売られる火伏せの凧が、江戸時代に由来するという通説とは異なり、むしろ20世紀に誕生し形成していったプロセスを検証するものだった。刺激的な発表であったが、その一方で、イギリスの歴史学者であるエリック・ホブズボームが提示した「伝統の創造」のような、「古いと思われるものが実は新しい」というストーリーだけでまとめてしまっていることに、もったいないという思いを抱いた。例えば凧市を、特定の時期に開かれる市場（マーケット）として捉えてみることを提案したい。東京には、入谷・鬼子母神の朝顔市や浅草観音のほおずき市など、社寺の境内に立つ市が数多くあり、季節の風物詩となっている。なぜ現代的でグローバルな都市の住人でありながら、人々は火伏せの凧という「江戸」を感じさせるものを買求めるのだろうか。このような問いの立て方をすることによって、「美術」「玩具」「呪物」といった既成の枠組みを横断する凧の文化的な特徴が見えてくるのではないだろうか。単に「伝統の創造」を指摘して終わるのではなく、さらなる研究の進展を期待したい。

日本を国際的に研究するために必要なのは、一見小さなものであったとしても、しっかりと研究と教育を着実に積み重ねていくことだ。今回のワークショップは、日本での文献やフィールドワークの調査に裏付けられた国際的な日本研究の進展を実感させるものであった。